

## 律法か福音か／律法は人を救わない

使徒パウロは3章9～18節において「詩編」と「イザヤ書」のいろいろな箇所から、神に反逆し反抗する人間の不信仰と背信の姿を描いた言葉を引用して、いかに人間が神から離れた存在であるか、神の前に罪を負った存在であるかを語った。それに続く19～20節で「正しい者はいない、ひとりもない」ということを、律法の前に立たされたときの人間の無力さを描くことによってもっと明白に説明しようとする。

さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためです。なぜなら律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。(19～20節)

これは短い文章であるが、パウロはここで非常に大切な律法論を展開している。すべての人が律法の下にあるということは、律法によって責任を問われる立場に置かれているということの意味している。それでは律法とは何か？それは「神のみ心」の表れである。神の前に歩む者はこのようであればならない、という神のご意志の表れである。旧約時代、それはモーセの律法として与えられた。旧約聖書は崇高な内容の神の律法で満ちている。

律法は「～せよ」「～してはならない」と命令文の形をとっているが、本来それは決して罰を与える恐ろしい厳しいオキテとして与えられたものではなかった。それは、神に従う者に命を与え祝福をもたらすものとして与えられた。人間に対する神の恵みとして与えられたものである。

しかし、その良きもの（善なるもの）として与えられたはずの律法が、逆に人間を裁きへと追いやって行く。人間を絶望へ、死へと追いやっていく。何故か。それは、たとえ律法はすばらしいものであっても、人間はそれを百パーセント守ることはできないからである。守ろうとすればするほど、それを守ることでできない、この人間の弱さ、惨めさ（人間の罪）を律法は暴露するだけであるからである。

人間は律法の前にはまったく無力である。内なる罪のゆえに律法の要求を果すことができない。律法を守ろうとすればするほど、自分がいかに神の前に惨めな存在であるか、無力で、罪深い存在であるかがあらわになるだけである。パウロが19節と20節で「律法にはよっては、罪の自覚しか生じない」と言い、また「すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するためである」とはそういう意味なのである。

従って、律法を守ることによって（即ち人間の努力によって）神の前に義とされようという人間の全ての試みは失敗に終わるだけである。律法は私たちの上に重圧となつてのしかかって来る。私たちに死を宣告し、私たちを絶望へと追いやっていく。「ああ、わたしはなんと惨めな人間であろう！誰がこの死のからだから私を救ってくれるだろうか！」—これこそ罪に悩む人間の魂の絶望的な叫びなのである（7：24）。

では、誰が私を救ってくれるのか。誰がこの罪の力から私を救ってくれるのか。キリストによる罪の贖いと、キリストの内住による罪の力からの解放以外にないのである。